The Great Gatsby 作品成立過程の考察

内　田　　勉

スコット・フィッツジェラルドが書いた5冊のnovelは、[1] 未完成に終わった最後のnovelである *The Last Tycoon* も含め、いずれもよく研究されているが、*The Great Gatsby* の研究が量的にも質的にも圧倒的であることは改めて言うまでもない。しかし、奇妙に思える事実がある。作品成立過程の研究という分野に限っては、*The Great Gatsby* だけがいまだに本格的な研究が現れていない。出版されたフィッツジェラルドの最初のnovelである *This Side of Paradise* に関しては、James West の *The Making of "This Side of Paradise"* (1983) がある。2作目の *The Beautiful and the Damned* についてはAmy Eliasの論考 "The Composition and Revision of Fitzgerald's *The Beautiful and the Damned*" (1990) がある。4作目の *Tender Is the Night* についてはMatthew J. Bruccoliが著した *The Composition of Tender Is the Night* (1963) があり、*The Last Tycoon* についても同著者による *"The Last of the Novelists": F. Scott Fitzgerald and The Last Tycoon* (1977) がある。しかし、*The Great Gatsby* の成立過程については上記に匹敵するような

1) novelと小説もしくは長編小説とは概念が異なる。例えば、a short novelとa short storyとは全く別物である。novelを意味する日本語を造れなかったことは、西洋近現代文学を日本語で語ることを困難にする一つの理由である。本論ではnovel, storyをそのまま英語表記することを断っておきたい。

本格的な研究が私の知る限り見当たらないのである。勿論、フィッツジェラルドの研究者達がこの点について怠っていたということではない。フィッツジェラルド研究における難問中の難問ということなのだろう。フィッツジェラルド研究の泰斗 Bruccoli が *The Great Gatsby* 成立過程について言及する時に、その主張が二転三転したことからも、この問題の並々ならぬ難しさが想像できる。Bruccoli は 1973 年にフィッツジェラルドの *The Great Gatsby* 直筆原稿を出版した時、その Introduction の中で、フィッツジェラルドが彼の novel の編集者 Maxwell Perkins（以下、パーキンズ）宛てに 1922 年 6 月に出した手紙を引用し、「背景は 1885 年の中西部とニューヨークでカトリック的要素を持つと思う」[2] と記されている novel が Ur-*Gatsby* であり、フィッツジェラルドが翌 23 年夏に書き始めたものがこれに当たると主張した。[3] しかし、1978 年に Bruccoli はその考えを改めた。新たな資料が発見されたからである。1925 年に *The Great Gatsby* が出版される直前、Willa Cather（以下、キャザー）の *A Lost Lady* の模倣ではないかと非難されるのを心配したフィッツジェラルドがキャザーに出した手紙が見つかり、その中に、*The Great Gatsby* の「最初の原稿の半ばまで書いていた時、*A Lost Lady* が出版され、私は最大級の喜びをもってそれを読ませて頂いた」[4] とあり、模倣は有り得ないという証拠の意味であろうか、その手紙には Ur-*Gatsby* と思われる直筆原稿 2 枚が同封されていたのである。*A Lost Lady* はアメリカで 1923 年 9 月 14 日に出版された。その時期にフィッツジェラルドが「最初の原稿の半ばまで書いていた」という記述は、後述するように、フィッツジェラ

2) Fitzgerald to Perkins, c. 20 June 1922. *Dear Scott/Dear Max*, 61. 以下、本論で引用するフィッツジェラルド／パーキンズ書簡は同書により、本文中の引用文末括弧内に頁数のみ記す。同書によらないフィッツジェラルド／パーキンズ書簡を引用する時には書名も記す。日本語への訳出は全て引用者自身による。以下、本論で取り上げる全ての英語文献について、引用を日本語で行う時は全て引用者自身の訳文である。

3) *The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, xiii–xv.

4) Matthew J. Bruccoli, "'An Instance of Apparent Plagiarism': F. Scott Fitzgerald, Willa Cather, and the First *Gatsby* Manuscript," *Princeton University Library Chronicle* 39 (Spring 1978), 171.

ルド自身による他の記録と必ずしも矛盾しないから、さしあたり問題ではない。問題は2枚の直筆原稿である。この原稿[5] から判断する限り、1923年夏に書き始められた原稿は、予想されていたよりもはるかに *The Great Gatsby* の最終原稿に近かったのである。Bruccoli は2000年に *Trimalchio* を出版したが、[6] その後書きに、新たに発見されたばかりのフィッツジェラルドの書簡（Charles C. Baldwin という編集者宛）を全文引用し、「私の3作目の novel（未刊行）を今書き終えたところである」という記述を証拠として、フィッツジェラルドが1924年5月に渡仏する前に *The Great Gatsby* の最初の原稿は既に書かれており、彼はこの原稿を全て持ってアメリカを離れ、渡仏後に書き直したという、全く新しい説を打ち出した。[7] この書簡の始めに「二日後に渡欧する」とあり、差出人の住所が Great Neck, Long Island となっているから、フィッツジェラルドが手紙の中に書いたことを信じれば、Bruccoli の主張は理論的には可能である。また、この原稿が実在したことは、キャザー宛の手紙に同封されていた2枚の原稿からも明らかである。しかし、フィッツジェラルドが「書き終えた」といっている書簡と2枚の原稿の存在だけで、彼が渡仏前に最初の原稿を書き上げていたという必要十分な論証になるだろうか。キャザーに送った原稿は SHAMROCK という透かしのはいった紙に書かれており、CASCADE BOND という透かしのある用紙に書かれた *The Great Gatsby* 最終原稿とは明白に区別できる。前者にある文章は確かに Ur-*Gatsby* というより、*The Great Gatsby* 最終原稿に近い。又、作中人物の名前と文章の完成度から判断して、最終原稿より前に書かれた原稿であることも確実である。しかし、この2枚の原稿は *The Great Gatsby* の第1章に相当する場面における Ada（後に Daisy に変更された）と

5) *Ibid.*, 174–5.

6) *The Great Gatsby* 最初のゲラ刷りで、フィッツジェラルドが1924年秋にパーキンズに送った *The Great Gatsby* 最終タイプスクリプトと実質的に同じと想定されているもの。

7) Bruccoli's Postscript in *Trimalchio: A Facsimile Edition of the Original Galley Proofs for The Great Gatsby.*

Jordan Vance（後に Jordan Baker に変わった）及び Caraway（綴りは原稿のまま、語り手にはなっていない）の振る舞いを描写した部分である。1923 年夏に書き始められた原稿はこの 2 枚以外には存在が不明なのである。従って、渡仏前に書かれていた原稿について、2 枚の物証が示す限りでは、novel の最初の部分の最初の原稿は既に書かれていたということしか確実には言えない筈である。このことは、*The Great Gatsby* の核心にある内容と作者の伝記的事実が関係していたのかどうかという問題と直接関連することなので、十分に注意を払った上で議論する必要がある。[8)]

上記の伝記的事実とは、フィッツジェラルドが *The Great Gatsby* の完成に向けて、フランスのリヴィエラ海岸に求めた瀟洒な別荘で原稿執筆に専念していた 1924 年の夏、妻ゼルダがフランス海軍の航空兵 Edouard Jozan と親しくなり、フィッツジェラルドに大きな衝撃を与えた事件である。フィッツジェラルドによる彼自身の生活記録の意味も持つ *Ledger*

---

8) 例えば、フィッツジェラルド夫妻が 1924 年 5 月にアメリカから渡仏したということは、何を以って事実と認定できるのだろうか。フィッツジェラルド自身による生活記録 *Ledger* によると、1924 年 4 月の項に "Decision on 15th to go to Europe" とあり、同年 5 月の項に "Sailed. ...Paris. ...Trip to Cannes" と記されている（178）。1924 年 4 月 29 日付けで米国から発行されたフィッツジェラルドのパスポートのコピーには、同行者が妻 Zelda と娘 Frances で、渡航先はフランスと明記されている（*The Romantic Egoists*, 115）。1924 年 5 月に南フランス Hyères からフィッツジェラルドがアメリカにいる Thomas Boyd に宛てた返信には「あなたからの手紙がここに到着して以来最初のもの」と書いてある（*Life in Letters*, 68）。フィッツジェラルド夫妻が 1924 年 5 月にアメリカから渡仏したことは確実である。Bruccoli は渡航の時期を 5 月始め "early in May"（*Some Sort of Epic Grandeur*, 2nd Revised Edition, 192）と特定しているが、early と決められる根拠は何だろうか。私には分からない。Bruccoli も証拠を示さない。Bruccoli によるフィッツジェラルドの伝記は実証性は高いが、作品分析がないというのがアメリカの学界での一般的評価だろう。Jackson Bryer も Maryland 大学における 2004-2005 年にわたるセミナーで同様の見解を述べていた。私は逆の感想を持っている。*Some Sort of Epic Grandeur* においては量的には確かに作品分析の部分は少ない。しかし、Bruccoli が作品分析をする時には深い洞察が示されていると思う。それに対し、Bruccoli の「実証的記述」には穴が多い。前記したように、根拠を示さない「事実」が至るところに出てくるのである。実証性が評価されている Bruccoli のフィッツジェラルド伝さえ埋められていない穴に満ちている。フィッツジェラルドに関する実証性の更に高い研究が今必要とされていると痛感する。本論は実証そのものが目的ではないので、本論における全ての記述に対し、実証的裏付けを注記することはしない。むしろ、略記もしくは省略している。しかし、私自身が行う全ての記述に対し、挙証責任を負っているという自覚を持ちながら議論を進めていく。

(178) には "The Big crisis—13th of July" と特記されている。妻に裏切られるという体験が *The Great Gatsby* の執筆過程で影響を与えたという見解は最近でも、フィッツジェラルド研究文献学の第一人者 Jackson R. Bryer が出している。[9] 前記した Bruccoli の最新の考え方に従えば、*The Great Gatsby* のプロットは基本的には渡仏前に出来上がっていたことになり、リヴィエラ滞在時、1924 年 7 月に起きたゼルダの恋愛事件が作家にとってどれほど大きな衝撃であったにせよ、執筆中の作品に本質的な影響を与えることはタイミング的に有り得ないという仮説も理論的には可能だろう。しかし、Bruccoli はこの説は採らない。1924 年 7 月における Zelda の裏切りをフィッツジェラルドは「*The Great Gatsby* に取り入れた」と主張しているのである。[10] これらの比較的最近の見解とは異なり、フィッツジェラルドの最初の伝記である Arthur Mizener の *Far Side of Paradise* においては、この時の恋愛沙汰は *The Great Gatsby* 執筆に影響を殆ど及ぼさなかったと記述されている (the Revised Edition, 178)。私は Mizener がその根拠として挙げるフィッツジェラルドのパーキンズ宛の手紙の中にある "It's been a fair summer. I've been unhappy but my work hasn't suffered from it" (August 27, 1924; *Letters of F. Scott Fitzgerald*, 166) という記述を重視する。いずれにせよ、フィッツジェラルドにとって重要かつ深刻であったこの伝記的事実と *The Great Gatsby* の成立との関係という基本的な事柄においてすら定説がないというのが現状なのである。原因の一つはフィッツジェラルドが渡仏前にどれだけの原稿を書いていたかを確定する資料が乏しいことにある。彼が 3 作目の novel を構想し、執筆を始めていたと思われる時期にほぼ相当する 1922 年の 10 月から 1924 年の 4 月まで、フィッツジェラルド夫妻はニューヨークに近い Great Neck に住んでいた。従って、編集者パーキンズとは直に

9) *A Historical Guide to F. Scott Fitzgerald*, 2004, p. 33.

10) *Classes on F. Scott Fitzgerald*, 2001, p. 80. Bruccoli は *Some Sort of Epic Grandeur*, 2 nd Revised Edition, 2002, p. 196 においても同じ見解を述べている。

会うことが多く、両者の往復書簡ではこの時期に当たるものは非常に少ない。しかし、少ないにせよ、他の資料も援用すれば、1922年6月に構想されたと言われるnovelが、どういう過程を経て、*The Great Gatsby*というテクストに成ったのかについて、考察を一歩なりとも進めることは出来ると思う。最新のものも含めこれまでの資料を総合的に検討し、*The Great Gatsby*直筆原稿を読むことから得られた知見も加えて、*The Great Gatsby*成立過程の研究を現状よりも前に進めたいというのが本論の目的である。方法としては、作品成立過程に言及もしくは関係する直接資料（story初出も含む）の再検討と、直筆原稿及びそれを基にしたテクスト（2種類の*Trimalchio*、ゲラ刷りの修正版、*The Great Gatsby*初版1刷）そのものの考察との両面から、言い換えれば、テクスト外の文書的証拠とテクスト内部の分析を総合する形でこの難問に取り組みたい。

まず最初に検討すべきテクスト外の資料は前記した*Ledger*である。フィッツジェラルドは作品を書き上げる前に、その作品を担保として前金を出版社に要求することが、作家として生活を始めた直後から常態化していた。そのため、編集者や自分のエージェントに出す手紙には、作品の進捗状況を誇大に書くことは珍しくなかった。しかし、作家自身の備忘録でもあった*Ledger*の記述は、実際よりも誇大に書く動機はない。事実そのものを記さなければ*Ledger*を書く意味はないのである。*The Great Gatsby*の成立過程を考える上でまず*Ledger*の記述の検討を第一とする理由はそこにある。

フィッツジェラルドが1924年5月に渡仏する前までに3作目のnovelに関し、*Ledger*の中で言及したことは4度ある。[11] June 1923: Begin my novel; July 1923: Intermittent work on novel; September 1923: A new schedule + more work on novel; April 1924: Out of the woods

11) 既にBruccoliが指摘したことだが、私は*Ledger*を読んで確認した。

at last + starting novel.[12)]

これらの記述は前に引用したキャザー宛の手紙の内容にはほぼ一致するけれども、意外なことに、1922年6月にフィッツジェラルドがパーキンズに出した手紙の中で初めてnovelの構想を示したことに符合する記録は*Ledger*にはないのである。フィッツジェラルドは3作目のnovelの構想をパーキンズに知らせた後、丸一年間、このnovelに全く手をつけなかったということになるのだろうか。1922年の夏にフィッツジェラルドが最も精力的にした仕事は戯曲*The Vegitable*の執筆であり、同年10月にミネソタ州セントポール近郊のWhite Bear Yacht Clubから退去を迫られて、Great Neckに転居してからは、近くに住んでいたRing Lardner達と一緒に飲み明かすような日々を送ることが続いた。White Bear Yacht Clubから退去を迫られたのも、フィッツジェラルド夫妻がしばしばパーティーを開いて大騒ぎをし、近隣の顰蹙を買ったからである。これらのことを考えれば、パーキンズに構想を伝えた後丸一年間、novelに関する仕事は何もしなかった、ということも有り得るかもしれない。しかし、私は*Ledger*の別の箇所に書いてある記録に注目したい。*Ledger*全体の半分以上はフィッツジェラルドの生活記録であるが、それとは別に、フィッツジェラルドの出版作品の記録がリストの形式で、執筆時期、掲載雑誌名及び刊行年月日等を含め、作家自身により詳細に書かれている。フィッツジェラルドは*The Great Gatsby*執筆に先立ち、テーマ的にこれと関連するstoryをいくつか書いた。その中で、フィッツジェラルド自身が*The Great Gatsby*との直接的関連性を認めている作品の一つは"Absolution"である。1934年4月15日付けの手紙（John Jamieson宛）の中で「"Absolution"はGatsbyの人生の初めの部分の描写として意図されたものであるが、Gatsbyのミステリー性を保持するため、切り取ったのであ

12) *Ledger*, p. 177, 178. 最後のOut of the woods at lastの意味は、自分の劇公演が大失敗に終わったこと等もあって、大きな借金を背負ったフィッツジェラルドが、その返済と渡航費及び外国滞在の経費捻出の為、大衆誌に1923年11月から翌年4月にかけて、10本にも上るstoryを書きまくり（*Ledger*, 5–6）、やっとその激務から解放されたことである。

る」とフィッツジェラルドは書いている。[13)]

"Absolution" は *Ledger* (6) によると 1923 年 6 月に書かれた。そして、この作品は不信心な少年がカトリック司祭に告解する話しである。これでまず最初の材料は揃った。"Absolution" が元々は *The Great Gatsby* の一部であったことを作者が認めた書簡、3 作目の novel が「カトリック的要素を持つ」と書いたフィッツジェラルドの 1922 年 6 月の書簡、さらに「1923 年 6 月 my novel 開始」という *Ledger* (177) の記録を照らし合わせれば、フィッツジェラルドはその構想をパーキンズ宛ての書簡に示してから一年後に novel を書き始めたという推定がなされたとしてもおかしくはない。しかし、*The Great Gatsby* というテクストがカトリック的要素を持つとは言い難いが為、1923 年 6 月に書き始められた原稿は Ur-*Gatsby* という仮説が立てられたのである。前記したように、フィッツジェラルドのキャザー宛の手紙の中に、我々が知っている *The Great Gatsby* の直筆原稿とは明白に異なる原稿が 2 枚同封されていたので、Ur-*Gatsby* の実在が証明された。仮説が物証によって真実であることが証明される。フィッツジェラルド文献学にとって極めてスリリングな展開であった。但し、これも前記したように、Ur-*Gatsby* の実在は証明されたが、それは "Absolution" を一部とするような「カトリック的要素を持つ」テクストとは考えがたく、むしろ、*The Great Gatsby* の直筆最終原稿に非常に近似したものであった。この矛盾をどう考えるか。

ここで注目したいのは 1922 年 9 月に "Winter Dreams" が執筆されたという *Ledger* (4) の記録である。*The Great Gatsby* とテーマ的に関連する作品の中でも、関連性が最も深いのは "Winter Dreams" だからである。この作品は *Metropolitan* Magazine (1922 年 12 月) に掲載されたのが初出であるが、フィッツジェラルドの三番目の短編集として 1926 年に刊行された *All the Sad Young Men* の中に収録された時に、非常に多くの改変が行われた。我々が現在読むことが出来る "Winter Dreams" は殆

13) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, 1963, p. 509.

どの場合、改変が行われたテクストである。[14] 改変されたテクストでも、愛の喪失という *The Great Gatsby* とのテーマ的共通性は明白に読み取れるが、それ以上に本質的な同質性が "Winter Dreams" と *The Great Gatsby* とに共有されていたことを理解するためには初出を読むことが不可欠である。[15] なぜなら、フィッツジェラルドは "Winter Dreams" の中で使われた表現の多くをほぼそのまま *The Great Gatsby* の中でリサイクルし、*Gatsby* 出版の翌年に "Winter Dreams" を短編集の中に組み入れる時、リサイクルした箇所を全て初出のテクストから削除したからである。フィッツジェラルドはある story で使った表現や描写を novel の中でリサイクルすることをしばしば行ったが、リサイクルしていることを読者に知られることは極度に嫌った。従って、novel の中でリサイクルした箇所のある story を短編集に収録する時には、リサイクル部分を削除するということを常に行っていた。[16] "Winter Dreams" の初出テクストから移植された箇所のうち、一つについては既に何人かの研究者から指摘されてい

---

14) 2005 年に "Winter Dreams" の初出テクストを掲載した本が 2 種類出た。実に 83 年ぶりの公刊である。*The Perfect Hour: The Romance of F. Scott Fitzgerald and Ginevra King*, 156–185; *The Best Early Stories of F. Scott Fitzgerald*, 230–252.

15) "Winter Dreams" を含めてフィッツジェラルドの 5 つの story と 2 作目の novel の初出が *Metropolitan* Magazine による。フィッツジェラルド作品の精緻な研究をするためには不可欠の資料であるが、私が 2004–2005 年にアメリカで調べた限り、*Metropolitan* Magazine を保有するアメリカの大学図書館は殆どなく、現物のコピーを許可している機関は議会図書館（Library of Congress）のみであった。しかし、現物の劣化がひどく、コピーをする時にいくら注意を払っても、頁の隅が破損したりすることを避けることが出来なかった。フィッツジェラルド研究者にとって憂うべき事態であると思う。

16) story の初出を読めば、novel でリサイクルしていることが分かってしまうのに、短編集を刊行する時にリサイクル部分を削除することに意味があるのかと思う人がいるかもしれない。フィッツジェラルドは大衆誌に掲載される自分の story は文学的に価値があるというよりも novel を書くための時間を稼ぐ手段と考えていた。但し、story が短編集という本の形になる時には、瞬時に消費される雑誌とは異なり、永続するメディアに載るわけであるから、フィッツジェラルドは story の選択に注意を払い、初出のテクストの文章に磨きをかけた。同じ story でも、雑誌に載る場合と本になる場合とで、フィッツジェラルドの意識の中では意味が違っていたのである。事実としても、フィッツジェラルドの短編集が刊行されると様々な書評が現れたが、雑誌に掲載された story の場合にはそのような反応は稀であった。また、novel を読む読者と短編集を読む読者は重なっているとフィッツジェラルドは思っていたし（出版社はいずれも Scribner である）、彼は何よりも novel によって自分の作家としての力量を測ってもらいたかったのである。

る。"Winter Dreams" の主人公 Dexter Green が憧れの Judy Jones に初めて招かれた時に、彼女の住む豪邸に対して彼はどういう意味で魅せられたのかを描写した表現がほぼそのまま、*The Great Gatsby* における主人公 Jay Gatsby が Daisy Fay の邸宅を初めて目にした時の感動を描く場面に使われた箇所である。しかし、リサイクルされた箇所はそれだけではないのである。それ以外の例を列挙しよう。

"It excited him that many men had loved her. It increased her value in his eyes" (106; 178).[17] "the cold she had caught, which made her voice more husky and charming than ever (106; 179). "making him overwhelmingly conscious of the youth and mystery that wealth imprisons and preserves, the freshness of many clothes, …gleaming things, safe and proud above the hot struggles of the poor (101; 179).

上記のリサイクル箇所は全て、作品の主人公にとって愛と憧憬の対象となる富裕階級の娘がどういう存在であり、どのような魅力を秘めているのかを表現する部分である。Gatsby にとって Daisy がどういう意味を持っていたのかを表現する時に、フィッツジェラルドが "Winter Dreams" からこれだけの部分をリサイクルしていたことに驚きも感ずるのだが、重要なことは、二つの作品におけるヒーローとヒロインの関係は同じ表現でしか語り得ないほど本質的な同一性があるということであろう。そればかりではない。フィッツジェラルドが *The Great Gatsby* の中で "Winter Dreams" からリサイクルした極め付きと言える部分が他にまだあるのである。それは *The Great Gatsby* の key sentence の一つと言ってもよい "he found that he had committed himself to the following of a grail" (初版 179) という表現である。この表現は *The Great Gatsby* の最終原稿 (222) にもあるが、その後の初版刊行に到るまでの度重なるテクストの修

17) 括弧内の前者の数字が *Metropolitan Magazine* の頁、後者が *The Great Gatsby* 初版の頁を表し、以下同様である。

正を経ても、一貫して保持されており、この novel の根幹にある概念の一つと位置付けても間違いないであろう。「世界にはあらゆる種類の愛がある。しかし、同じ愛というのは二度とない。」これはフィッツジェラルドの作品 "The Sensible Thing" の結びの文章であるが、Gatsby は愛という名に値する愛を生涯でただ一度だけ経験した。Gatsby のそのユニークな愛の本質を語る表現が、実は、"Winter Dreams" からリサイクルされたものであった。以上に記したリサイクル部分の頻度と内容を考えれば、"Winter Dreams" と *The Great Gatsby* との間に、今まで指摘されてきたよりもはるかに本質的な類縁性があったことは明らかだろう。だから、*The Great Gatsby* には本質的な新しさがないと言いたいのではない。*The Great Gatsby* の根幹を成す概念の一つが 1922 年 9 月に書かれた "Winter Dreams" の中で既に使われていた事実に着目して、*The Great Gatsby* の成立過程を新しい視座から考え直す試みをしたいのである。

フィッツジェラルドが 1922 年 6 月 20 日頃の手紙の中で、「背景は 1885 年の中西部とニューヨークでカトリック的要素を持つ」novel を書き始めるかもしれないと述べた時、結局、こういう novel が書かれることは遂になかった（その構想に基づく原稿が全くない）ことを事実として我々は知っているにしても、フィッツジェラルドが心にもない嘘を言っていた、というようには私には考えにくいのである。フィッツジェラルドの肩を持ちたいからではない。資料を読む限り、フィッツジェラルドがこの時期にこのような構想を持ち始めていたと考えたほうが、その後の彼の創作活動の実態に即していて自然だと思うからだ。フィッツジェラルドはその構想をそのままの形で一つの novel に結実させることはなかったが、構想の核にあったものはいくつかの story の中に分散される形で実現された、というのが私の取りあえずの考え方である。*Ledger*（4）の記録を見ると、1922 年 2 月に "The Curious Case of Benjamin Button" を執筆してから翌 23 年 1 月に "Dice, Brass Knuckles & Guitar" を書くまでのおよそ一年間、フィッツジェラルドが story をたった一つしか書いていないことが

目に付く。その story が 1922 年 9 月に書かれた "Winter Dreams" である。この作品は中西部とニューヨークを背景としている。富裕階級の娘 Judy Jones に憧れた Dexter Green が奮起して、社会的成功と富を得るが、Judy と結婚することは出来ず、最後に深い喪失感に襲われ、もはや人生に何の意味も見出すことが出来なくなるというプロットは *The Great Gatsby* と同じではないにしても、本質的なところで両者は共通している。Green の Judy に対する愛も、Gatsby の Daisy に対する愛も、恋愛つまりエロスとは異なるものになってしまった。西洋文学の伝統の中にある grail「聖杯」探求の次元にまで昇華してしまったからである。失恋しても、また新たな出会いがあるというような常識の働く人間の話しではない。愛の対象を手中に出来れば全てを得たことになり、生の全き幸福感に包まれる予感がするが、手中に出来なければ人生は全て無意味という感覚に捉われた人間の物語なのである。勿論、東部の一流大学を卒業して、社会的に認められたビジネスで着々と富を築いていく Dexter Green は、Gatsby と比べればはるかに常識がある。けれども、愛や結婚に対する思いとなると、Green は Gatsby に限りなく近づき、最後の場面では、自分が手にした社会的地位や富にも拘らず、夢が失われた今の自分にはもう何もないという絶望感に打ちのめされるのである。この作品で初めて使われる key sentence が *The Great Gatsby* においてリサイクルされたことについては既に述べた。フィッツジェラルドは 1922 年 6 月に novel の要素として考えていたことの一部を次第に深め、変容させて、まず最初に "Winter Dreams" という作品に結晶させたと思うのである。私の主観的判断だけではない。*The Great Gatsby* 出版後の 1925 年 6 月 1 日に、フィッツジェラルド自身がパーキンズへの書簡の中で「Winter Dreams は Gatsby の第一草稿のようなもの」(112) と述べているのである。私が主張したいことは、フィッツジェラルドが 1922 年 6 月に、どんなに曖昧な形であるにせよ、novel の構想を持っていたとすれば、それはまず、"Winter Dreams" という形に結果する他ない構想であった筈だというこ

とである。それは取りも直さず、3作目の novel として構想されたものは初めから本質的な部分では *The Great Gatsby* と共通していて、Ur-*Gatsby* を仮定する余地は全くなかったということである。従って、Ur-*Gatsby* の原稿だと思われた2枚の原稿が *The Great Gatsby* に非常に親和するのは矛盾ではなく、当然なのである。フィッツジェラルドが1922年6月の段階でむしろ *The Great Gatsby* に本質的にはよく似た構想を既に抱き始めていたという私の考えは、"Winter Dreams" と上記パーキンズ宛の書簡だけで支えられのではない。フィッツジェラルドが "Winter Dreams" の次に書いた "Dice, Brass Knuckles & Guitar" においても、"Winter Dreams" の場合と同様、重要な箇所が *The Great Gatsby* の中で、そっくりそのままではないにせよリサイクルされているのである。この作品は *Hearst's International* (May 1923) に掲載されたのが初出であるが、短編集に収録されたのはフィッツジェラルドの死後であったので、現行のいずれの版も初出のテクストと同一であり、リサイクルされた箇所もそのまま出ている。この作品の主人公 Jim Powell は Long Island の Southampton の富裕階級に一旦は受け入れられ、ビジネスの学校経営も成功するが、規律の適用を厳格・公平に行ったことがきっかけとなり、最終的には富裕階級から侮蔑の言葉を浴びせられ、拒絶される。その時、別れ際に敢えて Jim と最後の握手をしに来て、彼を感動させたただ一人の娘の名前が Katzby であったことも興味深いが、それよりも重要なことは、Jim が富裕階級の人々に拒絶される場面を目撃していた Amanthis Powell（姓が Jim と同じなのは偶然で血縁・姻戚関係はない）が Jim の正しさを伝えるために彼に言う言葉が "You're better than all of them put together" (*Price Was High*, 63) であったということである。Gatsby の夢が砕かれた時に、その夢を砕いた富裕階級の醜い現実と Gatsby の愛の真実性を知った Nick Carraway が Gatsby を賞賛して言った言葉 "You're worth the whole damn bunch of them put together" (*The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, 226; 初版

185 には of them がない）と非常に近似している。言葉そのものだけではなく、その言葉が使われる状況も非常に似ている。いずれの作品においても、富裕階級の中に地歩を築こうとし、一旦成功するや否や、徹底的に排除された主人公に対し、彼の純粋さと彼を排除する富裕階級の卑劣さを知るただ一人の人間が主人公を称揚する時に使われているのである。1923 年 6 月に書き始められ、後に *The Great Gatsby* として完成する novel が 1922 年 6 月に初めて構想されたとすれば、そのほぼ直後に続けて執筆された "Winter Dreams" や "Dice, Brass Knuckles & Guitar" の内容と全く無縁なものだったとは考えにくいことはもはや明らかだろうと思う。

では、"Absolution" と *The Great Gatsby* との関係はどうなるのだろうか。作品内容から判断すれば、両者に関係がないことは明白である。しかし、フィッツジェラルドは前に引用した 1934 年 4 月 15 日付けの書簡だけではなく、1924 年 4 月 10 日及び同年 6 月 18 日付のパーキンズ宛の書簡において、"Absolution" が *The Great Gatsby* の一部であったことを繰り返し述べているのである（69, 72）。このようなフィッツジェラルド書簡における記述を作品成立過程の中で、どのように位置づけることが出来るのだろうか。本論では、フィッツジェラルドの信仰と創作活動の遍歴を辿ることによってこの問題の解明を試みたい。

フィッツジェラルドは信仰心篤いカトリック教徒である両親のもとに生まれ、厳格なカトリック教育を受けた。Newman School の校長であった Father Fay には特にフィッツジェラルドが多感な時期、大きな影響を受けた。フィッツジェラルド初期の文学には明らかにカトリック的要素を認めることが出来る。フィッツジェラルドは修道院を舞台とする "Ordeal"（初出 1915 年 6 月）や "Benediction"（初出 1920 年）という作品も書いているし、*This Side of Paradise*（初出 1920 年）において主人公 Amory Blain が大罪を犯そうとする時に、突如として出現する悪魔のような姿に怯える場面等はカトリック的良心の顕現であろう（Cambridge 版, 108–111）。しかし、それ以降、急速にフィッツジェラルド文学からカ

トリック的要素は消失していくというのが実態であった、と私は理解している。*Ledger*（172）によると、フィッツジェラルドは21歳の年、即ち1917年9月から1918年8月までを次のように総括している。“A year of enormous importance. Work and Zelda. Last year as a Catholic.” 1917年11月に軍隊に入って以降、フィッツジェラルドは創作行為に自分の天職を見出し、後に妻となるゼルダと出会い、またカトリックを捨てた。棄教の理由についてはここでは立ち入らない。フィッツジェラルドが重大な年として総括した21歳の時に起きた三つの出来事の一つにカトリック棄教を挙げたという事実だけを指摘しておきたい。また、*Ledger*（173）には1919年1月の項にFather Fayの死が書かれている。こうした伝記的事実を踏まえて考えると、1922年6月に構想されたnovelが「カトリック的要素を持つ」とフィッツジェラルドがパーキンズ宛書簡に書いたことには意外な感じがあるけれども、それを否定する根拠を私は持っていない。むしろ、“Absolution”が1923年6月に執筆された事実を重視する。フィッツジェラルドの上記書簡を基にして考えれば、彼がこのような構想を持って1923年6月にnovelの執筆を始めた時、それまで暖めていたと思われる構想の中には、カトリック的要素の他に、上記した“Winter Dreams”や“Dice, Brass Knuckles & Guitar”に内在する要素も含まれていた筈である。しかし、後者の要素とカトリック的要素とは必ずしも親和しない。それにも拘らず、novelの中にカトリック的要素を織り込もうとすれば、novel全体のテーマと関係付けることは不可能で、どうしてもカトリック的要素の部分だけが固着してしまい、結局、storyという形でnovelから切り離されることでしか、カトリック的要素が結実することは有り得なかったと思うのである。1923年6月にフィッツジェラルドがnovelを書き始めたと同時に“Absolution”という別の作品も執筆していたというのは考えにくい。この時期、フィッツジェラルドは経済的に逼迫していたわけではなく、せっかく書き始めたnovelを中断してまで、金のためにstoryを書かねばならないという理由はなかった。novelの開始

と "Absolution" の執筆が同時期であったというのは偶然ではないだろう。novel として書き始めたものが *The Great Gatsby* として展開していくためには、元来の構想の中にあったカトリック的要素を "Absolution" という形でどうしても切り取らずにはすまないという葛藤が作品内に生じた結果だと思う。カトリックの影響から脱却して既に数年以上も経た後に、フィッツジェラルドの全作品の中で最もカトリック的色彩の濃い "Absolution" が、突如として 1923 年 6 月に執筆された理由はこれ以外に私は説明がつかないと思う。

1924 年 5 月に渡仏する前までにフィッツジェラルドは *The Great Gatsby* の原稿をどこまで書き進めていたのかという問題も考えなければならない。前記したように、この年 7 月におけるゼルダの恋愛事件が作品執筆に影響したかどうかという問題に直結するからである。劇公演の失敗に起因する経済的苦境から脱したフィッツジェラルドが、中断されていた novel の執筆を再開するのは 1924 年 4 月であった。この時期、彼がどこまで執筆を進めることが出来たかを推定するのに彼とパーキンズとの書簡がいくらかヒントを与えてくれる。4 月 1 日に、パーキンズは novel のタイトルは決まったかとフィッツジェラルドに尋ねている (272)。フィッツジェラルドの提案は "Among the Ash Heaps and Millionaires" であったが、4 月 7 日にパーキンズは、Ash Heaps というのは言葉が弱いという理由でこのタイトルに反対した (272)。4 月 10 日頃、フィッツジェラルドはパーキンズに直接会って novel について話しをしたが、話したことを補足するため、同日、パーキンズに手紙を出している。フィッツジェラルドはこの手紙の中で、*The Great Gatsby* 成立過程の究明を試みる者にとって興味深いことを言っているので引用したい。

> Much of what I wrote last summer was good but it was so interrupted that it was ragged & in approaching it from a new angle I've had to discard a lot of it—in one case 18,000 words

(part of which will appear in the Mercury as a short story).... This book will be a consciously artistic achievement & must depend on that as the 1st books did not. (69-70)

上記引用と *Ledger* の記録を照合することによって明確に言えることは、1923年6月に書き始められたnovelは、1924年4月の時点で新しい角度(a new angle) から書き直しを始めたために多くの部分が破棄され、破棄された一部が "Absolution" になったということである。しかし、この時点における転換とはnovelからカトリック的要素を排除したことを意味するのではない。なぜなら前記したように、"Absolution" 自体が1923年6月に書かれており、3作目のnovelを書き始めた直後か、もしくは書き始める前に、カトリック的要素はnovelの構想から外されたと考えるのが自然だからである。キャザーに送られた原稿と *The Great Gatsby* 最終原稿との最大の違いは視点の違いである。前者では全知 (omniscient) の視点で語られているのに対し、後者では一人称の語り手の視点になっている。また、上記引用の中に、「前二作とは異なり、芸術としての高い達成を意識している」とフィッツジェラルドが主張していることも考え合わせれば、「新しい角度から書き直し」というのは、1924年4月の時点までに、今日我々が最終原稿として知っている形に結果する原稿が書き始められたことを意味すると理解できる。

フィッツジェラルドのこの手紙に対する4月16日付けの返信で、パーキンズがnovelのタイトルについて興味深いことを言っている。"I always thought 'The Great Gatsby' was a suggestive and effective title, —with only the vaguest knowledge of the book, of course." (71) つまり 'The Great Gatsby' というタイトルはかなり前から、二人の間では話題に上っていたということであり、それにも拘らず、原稿そのものは "only the vaguest knowledge of the book" が示唆するように、4月16日の時点でも、それほど出来上がっていなかったことになる。原稿

がどこまで進んでいたかについては、以上の記述と *The Great Gatsby* の最終原稿を照らし合わせれば、事態がかなりはっきりしてくるのではないかと思う。

フィッツジェラルドが作品のタイトルとして "Among the Ash Heaps and Millionaires" を挙げたということは、彼のこの時点での意識において、the Ash Heaps という要素が作品の中で相当の重みを持っていたことを意味する。最終原稿においては a valley of ashes の描写は、最初の第3章と2番目の第3章（最終原稿には第3章が連続して二つあり、第4章がない）の両方に出てくるが、ash heaps という言葉が使われているのは最初の第3章のみである。[18] 少なくとも最初の第3章までの原稿に相当する部分が書かれていないと、上記のような具体的なタイトルをフィッツジェラルドが提案することは不可能だったろうと思う。最終原稿の最初の第3章は内容的に、今日我々が *The Great Gatsby* として知っている作品の第4章にほぼ相当する。但し、最終原稿においては、Gatsby が Nick とニューヨークでランチを共にする約束になっていた日の朝、Nick を車でニューヨークに連れ出す途中、燃料不足のため、George Wilson のガソリンスタンドで給油する場面があり、ここで a valley of ashes と Dr. T. J. Eckleburg の看板が描写されているのである。

我々は既に最終原稿とは別に、それより前の原稿が存在し、その中では Daisy に相当する人物の名前が Ada になっていることを知った。その原稿を用紙の種類から SHAMROCK 原稿と呼ぶことにすれば、SHAMROCK 原稿が一気に最終原稿に転換する形で書き直しが行われたのではないことを我々は知ることになる。なぜならば、Ada という名前は最終原稿においても最初の第3章までの範囲に限られるが、3回出現し、しかもその出現の仕方が非常に興味深いのである。Ada という名前が最終原稿の中で最初に出てくるのは第2章（現在の *The Great Gatsby* 第3

18) *The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, 73. 但し、ash heaps を含む句に削除を意味する横線が引かれている。

章に相当）57 頁で、Gatsby のパーティーに初めて出かけた Nick が帰り際に挨拶をするためホストの Gatsby を探している時、図書室で Gatsby と Jordan Baker が話しに夢中になっているところを偶然、目撃してしまう場面である。"They had been talking about Ada Buchanan." この記述から相当の確かさを持って推定できることは、Daisy との再会の段取りを Gatsby が Jordan に要請するという、作品の少なくとも前半部全体に直接関係することが書かれていた段階でも Daisy は Ada と呼ばれていたということである。最終原稿の最初の第 3 章の最後でも Ada という名前が二度出てくる。Gatsby とのニューヨークでのランチを終えた後、Nick が Jordan とデートをしている場面で、彼女が Gatsby から依頼されたことを Nick に伝える時に、Nick は Daisy という名を使っているのだが、Jordan の台詞の中では二度とも Ada という名前になっている。しかも、その Ada という名前が Daisy に書き換えられた跡が判然と読み取れるのである。[19] つまり、最終原稿最初の第 3 章の最後の 2 ページでは、Daisy という名前と Ada という名前が同時に使われ、後で Ada は Daisy に変えられて、統一がはかられたわけである。同じ人物に対して異なる名前が最終原稿の中で混在しているのはこの例ばかりではない。第 1 章では語り手の名前は Nick になっているが Daisy が Nick に話しかける時に一度、そして、Tom が Nick に話しかける時に一度、Dud という呼称を使っている。[20] 原稿の中に残されている証拠に基づけば、*The Great Gatsby* 最終原稿の第 1 章から最初の第 3 章までをフィッツジェラルドが CASCADE BOND 用紙の上に書いている時には、SHAMROCK 原稿の中で使われていた名前と後に変更した名前とが混在している状況であったと言える。しかし、混在の状況は、原稿を更に書き進めるうちに、フィッツジェラルドの意識の中で次第に整理統一され、2 番目の第 3 章以降ではもはやその種の混在は完全に姿を消したということではないかと思う。

---

19) *The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, 92–93.
20) *The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, 29; 33.

フィッツジェラルドは原稿を何度も書き直し、倦まず弛まず書き写す。その痕跡は最終原稿の随所に見出すことが出来る。SHAMROCK 原稿も最終原稿との近似性から考えて、書き直しを加えながら CASCADE BOND 用紙に書き写されたのではないだろうか。もしそうでないとしたら、最終原稿における上記のような名前の混在が発生する理由を説明することは非常に困難だろう。物証から明らかに言えることは、フィッツジェラルドは渡仏する時に SHAMROCK 原稿と CASCADE BOND 用紙を持って行った。[21] CASCADE BOND 用紙を使った原稿がその時既にどのくらい出来ていたかを判断できる資料はない。しかし、そのことは特に問題ではないだろう。1924 年 4 月初めに "Among the Ash Heaps and Millionaires" というタイトルをフィッツジェラルドが提案できる程度に原稿を書き進めていたことは、その用紙が SHAMROCK であったにせよ CASCADE BOND であったにせよ、確実と思われるからである。とすれば、*The Great Gatsby* のプロットは渡仏前までに、Gatsby が Jordan Baker（or Vance）に相談して、Nick（or Dud）に取り持ち役を依頼する形で、Daisy（or Ada）に再会することを企図していた所までは出来上がっていたことになる。フィッツジェラルドが 1924 年 4 月 10 日頃のパーキンズ宛書簡で、留保をつけながらも、「自分の novel を 6 月には仕上げる予定」(69) であるという見通しを述べたこともそれを裏付ける証左の一つになると思う。実際には予定は大幅に遅れ、フィッツジェラルドは 7 月になっても原稿執筆の只中にあった。そしてその時に起きた妻ゼルダの恋愛事件は作家の胸中に深い衝撃を与え、そのことが作品執筆中にも彼の脳裏から去ることはなかったかもしれない。しかし、それが故に *The Great Gatsby* の中心に不倫というテーマが設定されたのではない。その

21) CASCADE BOND 用紙は米国製であり、これをヨーロッパで調達することは不可能だったと思われる。フィッツジェラルドは *The Great Gatsby* 最終原稿の全てをこの用紙に書き、後にゲラ刷りの校正をする時にも同じ用紙を使った。しかしその途中で、用紙のストックが尽きてしまったようで、ゲラ刷り 30 からは GUTENBERG という透かしの入った別の用紙を使って校正している。Cf. *The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, 313.

テーマは、渡仏前には勿論のこと、恐らく、1923年6月に執筆され始めた時から意図されていたと思う。フィッツジェラルドはプリンストン在学中に富裕階級の娘 Ginevra King に袖にされるという深い傷を負った。その頃あるパーティーで耳にした言葉 "Poor boys shouldn't think of marrying rich girls" が彼の脳裏に焼き付けられ、それをフィッツジェラルドは *Ledger* 1916年8月の項に記録している（170）。1919年6月にフィッツジェラルドはゼルダに婚約を破棄される。[22] 貧しいが故のフィッツジェラルドの二度目の愛の挫折である。貧しいが故に愛を拒否される。裏切りは常に貧と結びついていた。これがフィッツジェラルド文学の最も基本にあるものであり、結局、*The Great Gatsby* はその問題を核心に置いて物語が展開するという形を取った。この作品における裏切りというのは、貧しい Gatsby が富裕階級の Daisy に裏切られ、Gatsby が成金になった後も結局は Daisy に利用される形で決定的に裏切られるということが大きな意味を持つのであり、Daisy が夫の Tom を一時的にせよ裏切るということは本質的な問題では全くないのである。このように考えれば、*The Great Gatsby* 執筆中に起きたフィッツジェラルドの悲痛な体験も、作品の中に取り込まれ得る種類のものではなかったことが明らかであろう。原稿の進展具合から判断しても、作品の扱う裏切りの意味を考えても、ゼルダの恋愛事件が *The Great Gatsby* 執筆に影響を与える余地はなかったと結論せざるを得ないと思う。最後の傍証として、Mizener が引用した同じ書簡、即ち、フィッツジェラルドが1924年8月25日頃にフランスからパーキンズに送った書簡から別の箇所を引用したい。「この novel は来週仕上がる。しかし、アメリカに届くのは10月1日以降になるだろう。なぜなら、一週間の休みを取った後、ゼルダと私は綿密な改訂を行うからだ」（75）。*The Great Gatsby* の最終原稿をフィッツジェラルドは妻ゼルダの協力を得ながら、より洗練された形に仕上げていったのである。

---

22) Jackson R. Bryer and Cathy W. Barks, eds. *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*, p. 37.

Bibliography

Primary Sources: Works by F. Scott Fitzgerald

"Winter Dreams," *Metropolitan Magazine* 56 (December 1922), 11–15, 98, 100–2, 104–7.

"Diamond Dick and the First Law of Woman," *Hearst's International* 45 (April 1924), 58–63, 134, 136.

"Absolution," *The American Mercury* 2 (June 1924), 141–49.

"The Sensible Thing," *Liberty* 1 (5 July 1924), 10–14.

The Great Gatsby. New York: Scribners, 1925.

The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald. ed. John Kuehl. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1965.

The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript, ed. Matthew J. Bruccoli. Washington: Bruccoli Clark/NCR, 1973.

F. Scott Fitzgerald's Ledger (A Facsimile), ed. Matthew J. Bruccoli. Washington: Bruccoli Clark/NCR, 1973.

The Romantic Egoists: A Pictorial Autobiography from the Scrapbooks and Albums of Scott and Zelda Fitzgerald, ed. Matthew J. Bruccoli, Scottie Fitzgerald, and Joan P. Kerr. New York: Scribners, 1974

Price Was High: The Last Uncollected Stories of F. Scott Fitzgerald, ed. Matthew J. Bruccoli. New York & London: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark, 1979.

The Great Gatsby: The Revised and Rewritten Galleys. ed. Matthew J. Bruccoli. New York & London: Garland, 1990.

The Great Gatsby. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Cambridge University Press, 1991.

This Side of Paradise. Ed. James L. W. West Ⅲ. New York: Cambridge University Press, 1995.

Trimalchio: A Facsimile Edition of the Original Galley Proofs for The Great Gatsby, afterword by Bruccoli. Columbia: University of South Carolina Press, 2000.

Trimalchio: An Early Version of The Great Gatsby. Ed. James L. W. West Ⅲ. New York: Cambridge University Press, 2000.

Flappers and Philosophers. Ed. James L. W. West Ⅲ. New York: Cambridge University Press, 2000.

Bruccoli, Matthew J., ed. *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*. New York:

Scribner, 1994.

Bryer, Jackson R., and John Kuehl, eds. *Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald —Perkins Correspondence*. New York: Charles Scribner's Sons, 1971.

Bryer, Jackson R., and Cathy W. Barks, eds. *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*. New York: St. Martin's Press, 2002.

Mangum, Bryant, ed. *The Best Early Stories of F. Scott Fitzgerald*. New York: Modern Library, 2005.

Turnbull, Andrew, ed. *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. New York: Charles Scribner's Sons, 1963.

Secondary Sources

Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Second revised edition, Columbia: University of South Carolina Press, 2002.

Bruccoli, Matthew J. *Classes on F. Scott Fitzgerald*. Columbia: Thomas Cooper Library, University of South Carolina, 2001.

Bruccoli, Matthew J. *The Composition of "Tender Is the Night": A Study of the Manuscripts*. Pittsburgh, Pa.: University of Pittsburgh Press, 1963.

Bruccoli, Matthew J. *The Last of the Novelists: F. Scott Fitzgerald and "The Last Tycoon."* Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1977.

Bruccoli, Matthew J. "'An Instance of Apparent Plagiarism': F. Scott Fitzgerald, Willa Cather, and the First *Gatsby* Manuscript," *Princeton University Library Chronicle* 39 (Spring 1978): 171–8.

Curnutt, Kirk. Ed. *A Historical Guide to F. Scott Fitzgerald*. Oxford University Press, 2004.

Elias, Amy J. "The Composition and Revision of Fitzgerald's *The Beautiful and the Damned*." *Princeton University Library Chronicle* 51 (Spring 1990): 245–66.

Mizener, Arthur. *Far Side of Paradise: A Biography of F. Scott Fitzgerald*. Revised edition. Boston: Houghton Mifflin, 1965.

West, James L. W. III. *The Making of "This Side of Paradise."* Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1983.

West, James L. W. III. *The Perfect Hour: The Romance of F. Scott Fitzgerald and Ginevra King*. New York: Random House, 2005.

（英語英米文化学科　教授）